

天保十四年卯二月 天文方より御届たいりやく之大畧

当月七日初昏 西南之方ニ当り其の幅一度半一尺五寸長廿四十度余の白氣はつき之

如き毛の相見申候 尤もつとも四日五日頃方少々雲間ニ相見へ候得共 睨しかと与

見様とも仕置候処 翌八日之夜長サ五十度ニ亘り相見へ候上者

全く彗星ほうきぼし之芒光ニ可有之与奉存候 併地下何禍有之候哉推測奉存候へ

共 先者七十度余も可有之与評義仕候 一体彗星之儀者近来西洋ニ而

測驗仕候而別ニ一種之行環有之候義ニ而其種類も数多候得共既ニ去ル

明和六年七月相見へ候彗星者長サ八十度ニ亘り芒光も両尖ニ相見へ

至而実極之形状ニ候得共別段兆應も無之義と届候 但し漢土ニ而ハ周秦

已来殊之外凶兆之旨ニも申将はたまた又除舊敷新式五色ニ就而兵乱水火災大臣

之患大臣専権等種々之古文有之候 西洋ニ而ハ往古者十二宮之信仰方其

占も品々有之候也 古き曆書ニ相見申候得共 已ニ近来之航海曆ニハ

日月之蝕しよく同様 彗星之見状を訴候上者一種之寿星与申迨ニ而妖星ニハ

無御座候

二月十日会津公方渋川助右 (左) 衛門様江御尋之由

此節西方南江掛り薄暮方白氣見はつきへ候右者白氣(彗星)候哉星ニ候哉 吉凶

之兆ニも候哉之段御尋之趣左ニ御答申上候

是者星ニハ御座有間敷西洋阿蘭陀辺を云ニ而近来發凡仕候 黄道光日之行道与申義ニ御座候与相唱

へ候類も可有御座候夫ハ即日之光地之□氣映して日之出入之時 日之行

道筋へ白氣隱候事御座候 右者全く此等之類ニも可有御座候哉 左候へ

者格別珍敷義めずらしきニも無之毎々相頭候事ニ而人事之吉凶之兆ニ拘り候事者  
毛頭無御座候乍去□兩三日見留候而已ニ未綻与治定仕置候間 尚已後も  
頭候ハバ篤とくと与見留候而治定之義可申上候以上

推古廿八年赤氣せつき(オーロラ) 丈余天ニ亘り形鶴尾ニ似たり

應翌二月厩戸皇子(聖徳太子)薨

天徳元年二月二日白雲式丈斗り度二三寸天ニ見る是を杵星きねほしと云

應十一日神祇官御蔵出火宮城大垣焼亡十五日親王且二条家出火  
嘉禎三年九月白雲天ニ亘ル

應翌正月大風倒民家

仁治二年二月赤氣けんといん

應六月大旱九月頭徳院(後鳥羽院)崩御

同十月白虹貫日

應二年夏天變アラキ

天正元年四月紅氣北天ニ亘ル

應六月光秀殺信長

朔曆二年正月廿二日赤氣西の方ニ見る 又六月暫ハ毎夜  
申下刻方出 夜ニ入光り甚敷 俗ニ是を火柱と云

應翌年正月十八日江戸大火

寛文八年正月西の方ニ白氣棹の如し

應二月朔日江戸大火

延宝二年二月十六日夜中老丈斗り黒雲東より西ニ敷空中橋の如し

應四月畿内洪水六月十三日十四日又大洪水人百溺死

翌三年夏天下飢饉死巷ニ溢ル

明和七年七月赤氣北の方ニ見る

應五月方八月迄大旱

天明八年四月十一日戌刻光物東北方西南へ飛 其光走  
の如く京大坂江戸海道筋一時ニ見る

應翌年所々大水是者格別の應なし 今年正月  
禁裏炎上是ハ跡光之應ニあらず